

台湾蘭嶼におけるタロイモ栽培

橋 本 征 治

Taro Cultivation in Lanyu, Formosa

HASHIMOTO Seiji

It is essential to investigate the cultural exchange with surrounding areas in analyzing the formation and developing process of Japanese prehistoric agriculture. The study on the 'Southern Route' is especially important because it is assumed that the 'Southern Route' had influenced deeply on the formation of farming culture of vegetative root crops which had been the staple crops in the Japanese fundamental agriculture. In general speaking, the 'Southern Route' consists of the continental route and the islands route. I have mainly studied the islands route, especially the route of the Kuroshio Current, which has Nansei Islands, Formosa, the Philippines along the Kuroshio Current.

Comparing similarities of the traditional farming culture, language, rituals, archaeological ruins and remains between the regions along the Kuroshio Current, we can find spatial continuity and discontinuity of the similarities. This discontinuity, however, is not the absolute discontinuity, but is a partial one, and it is considered to be a phenomenon appeared on the outer layer of culture when you see it in time series. Therefore, it is important to investigate what really exists in the depth of such discontinuity, or to find out why it looks discontinued on the outer layer. This paper, as a process of investigating such depth under discontinuity, studied Lanyu (Botel Tobago), the small island in the southeast of Formosa, and recorded and investigated the farming styles, land ownership, and

land usage, based on the field study of the farming system of root crops in Lanyu. Then, we compare them with those of Japanese Nansei Islands, Northern Philippines, and Fiji. As the result, Fiji and Nansei Islands showed the distinct contrast. Fiji people have developed the most rich and active farming culture of root crops, but Nansei Islanders have grown a few varieties with dedicated care. The root crops farming culture of Lanyu and Northern Philippines, which basically position between Fiji and Nansei Islands, showed similarity of something in-between concerning their characteristics. With close look, we found less variety in Lanyu which resembles the Nansei Islands, and ample variety in Northern Philippines which resemble Fiji.

These positioning of similarity agrees with the idea that Lanyu belongs to the cultural diffusion area of the farming culture of vegetative root crops, following the Kuroshio Current from the Philippines, Formosa, and to the Nansei Islands.

はじめに

先に、「日本の先史文化と周辺地域——南方の視点から——」（橋本、2004）と題して、先史時代における日本とその周辺地域における人と文化の流れを、まず東西軸と南北軸という大きな枠組みで捉え、さらに南北軸の中でも南軸、すなわち南方からの人・文化の流れが日本の農耕の基層部をなす根栽農耕の成立に大きく関わったことを論じた。その更なる展開として、本論では、南方ルートの中でもフィリピン・台湾・南西諸島という黒潮ルート（図1）に沿う根栽農耕文化伝播を跡付ける作業の一環として、台湾の蘭嶼（ランユ Lanyu）ヤミ（Yami）族に関する現地調査研究の成果の一端について述べる。

佐々木（2003、5-7）は、根栽農耕の主要な作物の一つであるタロイモ¹⁾が蘭嶼では盛んに栽培されているのに、バタン諸島・台湾島・先島諸島ではあまり見掛けなくなっていること、ヤマイモはそれとは逆の栽培分布パターンを示すこと、台湾島と蘭嶼・バタン諸島との間ではアワのモチ性へのこだわりで差違が見られることなどをあげて、八重山諸島と台湾山地・東部低地との間、台湾山地・東部低地と蘭嶼・バタン諸島の間には文化の断層、あるいは非連続な部分が認められることを指摘している。いっぽう、他の文化要素については、それとは異なった様相が呈されている。そこに、連続と非連続とが交錯する複雑な文化交流の様相が浮かび上がってくるとしている。それに関連して、筆者は南西諸島におけるサトイモ類栽培において

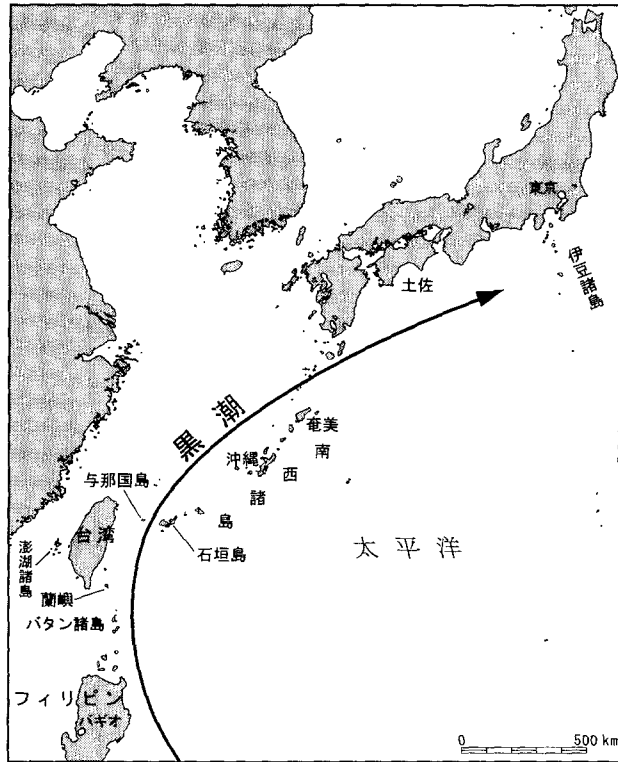


図1 対象地域と黒潮ルート

も、熱帯性作物で灌漑耕作される田芋を主として栽培する田芋栽培圏と温帯作物で畑作される里芋を主として栽培する里芋栽培圏とがあり、トカラ列島辺りが儀礼等も含めたところの両文化圏が交会する地域となっていることを示唆した。また琉球諸島内の田芋やヤマイモの栽培分布においても非連続が見られることを指摘した（橋本、2002、87-148）。

確かに、現象的には根栽農耕の構成要素において空間的な非連続が認められる。しかし、根栽農耕が廃れたかにみえる地域でもサトイモ類が栽培されたり、レリクト作物として遺存しているケースが認められることを無視することはできない。例えば、現在ではサトイモ類が商業的に栽培されている台湾の屏東・高雄・花蓮・台東や先島諸島では外来種が多く導入されているが、一部に在来種が栽培されたり、農地の片隅に在来種や様々なサトイモ類が遺存しているケースが見られる。それらは、これらの地域でもかつてはサトイモ類が農耕の重要な部分を担っていたことを証言しているようにみえる。いずれにしても、農耕文化の連続・非連続の実

態、そして消えたり消えかかったりしている連鎖の鎖を繋ぐ作業が、農耕伝播の経路を復原する上で欠かせないことは確かであろう。

そこで、その作業の一環として、黒潮ルートの根栽農耕文化伝播論において大きな鍵を握る蘭嶼のヤミ族の基底的農耕文化を明らかにするため数回にわたって実施した台湾調査に基づく文献・資料研究と、蘭嶼での2回にわたる実地調査（2004年3月、2005年3月）の成果を踏まえて述べることにしたい。

2. 蘭嶼ヤミ族の出自と基層的農耕文化

2.1 蘭嶼ヤミ (Yami) 族の出自をめぐって

まず、蘭嶼ヤミ族の文化を周辺地域との関係において位置づける概括的作業を行っておきたい。

ヤミ族は出自的にはマレイ系、それもフィリピン、特にバタン諸島 (Batan Is., バタネス Batanes 州) の人々と同根であるとみられる (中央研究院民族学研究所、1993、1244)。その使用言語はオーストロネシア語系のヘスペロネシア語派でバタン諸島で話されているバタニック諸語の一つといわれる (森口、2003、32-33)。しかし、そのことが直ちに人の移動や文化の伝播において南から北へという一方向の流れだけを想定することを全面的に支持しているわけではない。そのことは、300年ほど前にバタン島の南のサブタン (Sabtang) 島で争乱がおり、蘭嶼へと難を逃れた人たちがいて蘭嶼の住民と共住したといった伝承や、イバタン (Ibatan) の男が蘭嶼の女性を略奪し、一緒に暮らしたという伝承があることから、すでに蘭嶼には先住民がいたこと、そしてバタン諸島からの人の流れが何度かあったことがわかる (余、1998、91)。それに関連して、蘭嶼の甕棺葬はバタン諸島のものと同様で、野銀集落で採取された甕棺の呼称がバタン島のものと同様で、こうした甕棺葬は16~15BC以降にインドネシアやフィリピンで土着的に発展し、周辺部に広がったものとみられること、そして甕棺そのものは台湾の縄文土器や円山土器様式に発しているのではないかと指摘されていること (ベルウッド、1989、40、276) を付け加えておきたい。その意見に関連して、陳玉美 (2001、24-25) は、新石器時代晩期出土土器の石材は台湾島からのものであるとみて、蘭嶼における人間活動は早期には台湾島と、晩期は南方フィリピンのバタン島との関係が密接であったようにみえるという。事実、蘭嶼の各社 (集落) の祖先神話は台湾島の諸部族との類縁性をうかがわせている。例えば、イモルド (Imorud, ヤミ族) の祖先神話に、木 (*Siminapen Mitozid*…あかぎ) から生まれた石リ

トになっているのに対して、北中部のタイヤル（アタヤル）族、ブヌン族、ツォウ族ではアワ作に打製石器がセットとして利用されるといった、南北差も認められる。

局部磨製石器に似たヘラ（ピラ）型の土掘り具が蘭嶼・バタン島・八重山諸島にみられる。また、地炉がルカイ族や八重山諸島〜トカラ列島にみられ、蘭嶼で広く使われている有稜のイモ掘棒カカリ（*kakali*）は八重山で出土する有稜石器に類似するところがある。国分（1986、181-203）はこれらの事実をもってこうした道具や炉を使う食料生産様式がこれらの地域で繰り広げられたことを物語るのもであるとし、それらの地域が南方文化の流れを汲むことを示唆している（国分、1986、181-203）。なお、石製耨器が蘭嶼→^{りいたお}緑島→東海岸南部から^{ほんちゅうん}恒春半島・小琉球にかけて分布すること、および台湾東海岸の無文土器が八重山の赤褐色無文土器に近いといわれていることを付け加えておこう。

3. 蘭嶼ヤミ（タオ）族

3.1 蘭嶼

蘭嶼（図3）は、台湾島の南東部、台東市から東南東に約80kmの沖合に浮かぶ周囲約38km、面積45.7km²という小さな島で、北回帰線よりやや南に位置して亜熱帯気候下にある（経度121°30'08"~121°36'12"E、緯度22°00'06"~22°05'07"N…陳玉美纂修、2001、17）。バシー海峡を挟んで南方に110kmほど行くと、そこはすでにフィリピン領のバタン諸島である。蘭嶼は、ルソン島弧の一部をなし、第三紀の海底火山噴火で形成された火山島で、安山岩と安山岩集塊岩からなる。この小さな島嶼は全体に山勝ちで（最高峰は紅頭山552m）、島の周囲は隆起珊瑚礁と現生珊瑚礁で囲まれている。急流をなす小河川によって開析された僅かばかりの平地や扇状地には田畑が開かれている（図4）。山地下部の緩斜面も畑地として利用されている。湿潤な熱帯性海洋気候下にあつて、年降水量3081mm（那覇は2040mm、以下同様）、年平均気温22.6℃（22.7℃）、最寒月の1月の月平均気温が16.8℃（16.6℃）、年降雨日数は224日（123日）（1971~2000年平均）と、沖縄の那覇と比べて多雨である点を除けば、非常に似通った気候を呈しているといえよう。また、月別の変化（図5）をみても、平均最低気温は12~3月は16~19℃だが、その他の月は20℃を越える。降水量は3・4月が160mm台だが、それ以外の月は210mm~400mmである。

蘭嶼は郷鎮制度による蘭嶼郷にあたり、英名はBotel Tobagoで、かつては紅頭嶼とも呼ばれた。慶長12~13年（1607~1608）の古地図に、蘭嶼が「タバコ」と記されている。また、明末の1618年の張巒：『東西洋考』には紅頭嶼として見え、17世紀初頭にオランダ人が描いた絵Pakan Ilha FormasaにはBottolと注記されている（その後Tobacoとも記されたこともあり、や

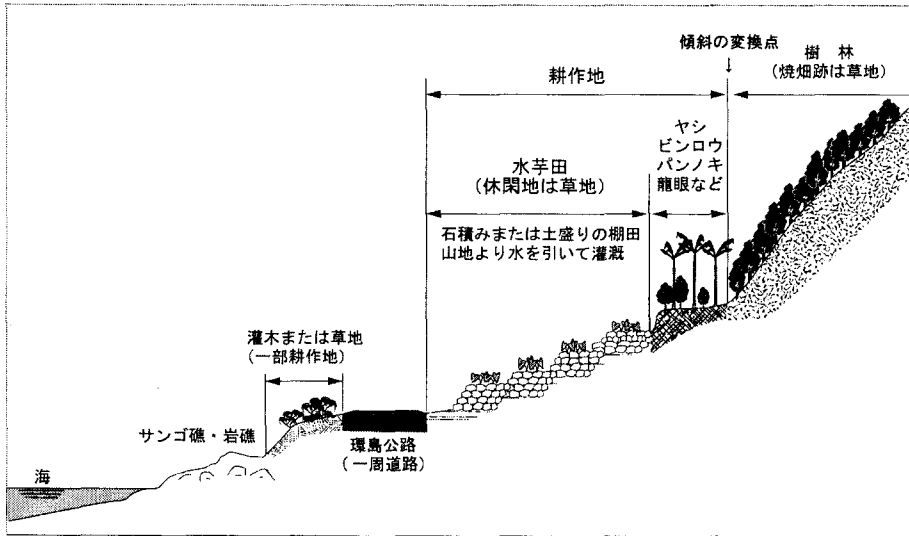
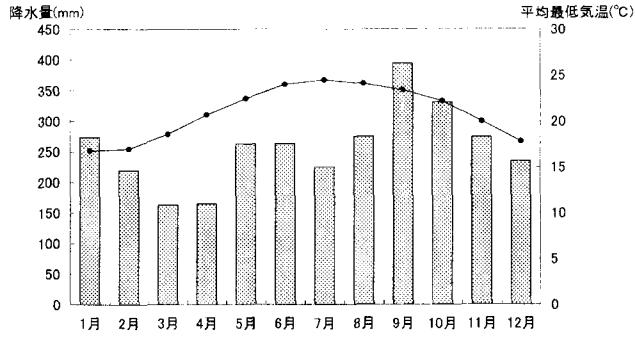
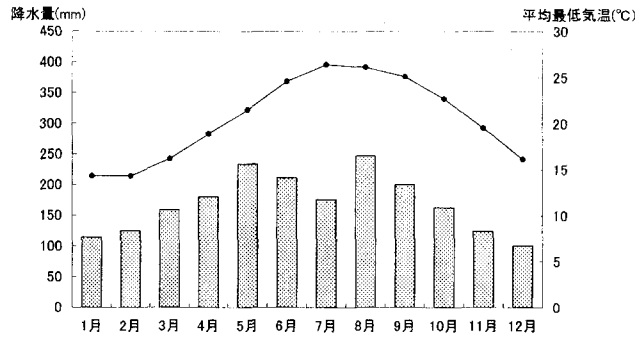


図4 蘭嶼の土地利用概念図



(A) 蘭嶼



(B) 那覇

図5 蘭嶼・那覇の気温・降水量

がて英文地図ではBottol Tobacco、そして現在はBotel Tobagoと記載されることが多くなった)。清代にはTabaco Ximaと記され、漢人の入植が進んだ。雍正2年(1724)の『台海使槎録』には台湾島と蘭嶼との間で交易のあったことが記され、雍正8年(1730)の『海国聞見録』には「…食諸芋海族之類、産沙金、臺灣曾有舟到其處…」とある(中央研究院民族学研究所、1993、1244-1245)。光緒3年(1877)には、正式に恒春県に属することになった。しかし、1896年に下関条約により台湾が日本に割譲されたのに伴って蘭嶼も日本の統治下に入り、紅頭嶼と呼ばれた。日本の敗戦により中国統治下に戻って、1947年には特産の胡蝶蘭に因んで蘭嶼郷と命名された。なお、住民(「原住」民)の民族名称として、鳥居龍蔵が明治30年(1897)の調査で初めてYami(雅美)という名称を用いたことから、ヤミ族という呼称が用いられてきたが、最近ではヤミ語で「人」を意味するタオ(Tao、達悟)という呼称も用いられるようになった。しかし、いずれか一方に定まったとも言えないのが現状である。ここでは、従来から広く用いられてきたヤミ(雅美、Yami)という呼称を用いる。なお、台湾では、日本でいう先住民を、中国語本来の意味に従って原住民という呼び方が一般的であるので、ここでは「原住」民または「原住」民族と表記することにした。

蘭嶼の人口(表1)は、1915年1618人で、第二次世界大戦中および戦後しばらくは減じたが、1960年以降は一貫して増加し、2006年現在ではかつての2.3倍に増え、戸数1105、人口3761となっている。蘭嶼郷(図3)は、紅頭村(紅頭Imorud・漁人Irataiの両集落あり、922人)、椰油村(椰油Yayu集落、793人)、朗島村(朗島Iraralai集落、792人)、東清村(東清IranumirukまたはIramilk、野銀Ivalinuの両集落あり、1074人)の4村6集落²⁾からなる。

表1 蘭嶼雅美族の人口推移

年	男	女	計
1915	864	754	1,618
1920	858	736	1,594
1925	833	761	1,594
1930	862	787	1,649
1935	885	810	1,695
1940	913	845	1,758
1945	680	593	1,273
1950	700	631	1,331
1955	802	698	1,500
1960	1,117	865	1,982
1965	1,066	976	2,042
1970	1,183	1,061	2,244
1975	1,299	1,171	2,470
1980	1,397	1,224	2,621
1985	1,466	1,288	2,754
1990	1,485	1,248	2,733
1995			3,023
2000	1,770	1,373	3,143
2003	1,898	1,560	3,458

余光弘(2004、4)による

4. ヤミ族の農耕——タロイモ栽培を中心として——

蘭嶼で最も重要な作物はサトイモ類（水芋 *suri*: *Colocasia esculenta* (L.) Schott、旱芋=畑サトイモ *keitan*: *Schismatoglotis calyptrata* (Roxb.) Zoll) である。ついで、ヤムイモ（ダイジョ大薯、*wi*: *Dioscorea alata* L.）、刺薯蕷（トゲドコロ *patan*: *D. esculenta* Burkill）、サツマイモ（*wakai*: *Ipomea batatas*）、アメリカサトイモ（*Xanthosoma sagittifolium*）、アワ（小米 *karai*: *Setaria italica* L. Beauv.）、サトウキビ（*Saccharum officinarum*）、バナナ（香蕉：*Musa sapientum* L. …蘭嶼芭蕉 *vinvu*: *Musa insularimontana* Hayata は重要な水果）、パンノキ（麵包樹 *Chipogo*: *Artocarpus altilis*）、ヤシ（椰子 *aniyoi*: *Cocos nucifera* L.）などが栽培されている。伝統的に主食とされきた水芋・旱芋を始めとするこれらの作物群は、ヤミ族の生活を支えてきた重要な作物であり、その点は今日においても変わりはない。中でも、タロイモは主食作物として広範に栽培されている。その他に、嗜好作物としてのピンロウ（檳榔）や繊維作物の紅頭アバカ、蘭嶼田薯（*iba*: *D. cumingii* Prain & Burk. …塊茎が食され、茎は繩材となる）などもみられる。

4.1 土地利用

奥田の報告（奥田他、1938……中央研究院民族学研究所、1993、1256から）によれば、1938年時点で、1戸平均でサツマイモ畑2～6筆、サトイモ畑2～10筆、水芋田20～50筆であり、1筆平均では畑地が0.83～3.3アール、水田は0.3～0.66アールであったという³⁾。

2002年の土地利用をみると（李、2005、2-4～2-5）、用地総面積が4460.4haで、うち632.9haが農牧用地となっている。ただし、耕地面積でみると760.28haで、内173.23haが水田、587.05haが畑地となっている。なお、農家戸数は484である。主たる農産物としてサツマイモ（95ha）と芋（サトイモ類94.21ha）があげられ、他に山芋、台湾地瓜、フィリピン地瓜なども食するとしている。

耕地には、常設の水田・常畑に相当する定耕地（休閑地も含む）と切り替え畑に相当する非定耕地（休閑地も含む）とがある。水田には水芋が植え付けられ、水芋田と呼ばれる。畑地は山芋が植え付けられる山芋田と小豆・サトイモ・甘藷などが栽培される旱田とがある。

水田の開墾に当たっては、まず灌漑可能な土地であることを見定めて、草木を切り払い、石垣を築き掘棒などを使って棚田を造成するとともに（島人にとって、この石垣田は継続的に使われる貴重な財産である）、新たに水路を造成したり、他の水田から引水して灌漑用水を確保する（灌漑水利用に当たっては灌漑に責任を負う人の同意を得ることが必要である）。なお、

分水・引水にあたっては木板で堰を設けておこなう。そして、草木は焼き払って（既墾地については耕地内での火入れは禁止されている）、しばらく放置して腐植させ、土地に馴染ませる。水田の利用期間は地力にもよるが、おおむね3～5年とされる。水芋を3～4年連作して、その後2～5年休閑し、地味が良いければ畑にして黄瓜などを作付ける。旱田としては砂質土地帯を開墾、草木を焼き払い、小石は取り除き、大石はそのままにしておく。旱田（畑地）は地味が良いければ、アワ→サツマイモ→サツマイモ→アワ→サツマイモ…（アワとサツマイモの順序が入れ替わることもあり）といった輪作体系を組んで、3～5年間にわたって利用された後、休閑に付される。地力の弱い旱田では旱芋（*keitān* ここでは畑サトイモと呼ぼう…後述）を1～2年栽培してから3～5年の休閑に入る。なお、山の畑では苳薯・蘭嶼茅が植えられている。こちらも、利用期間は地力によるが、おおむね1～3年である。山芋田は焼畑方式で開墾されるが、大きな樹木は切り株を残したままにしておく（焼きを禁じているところもあり）。そして、焼いてから少し時間をおいて（1～2カ月）、山芋が作付けられる。なお、農用地の所有権についていえば、水田は貴重な財産であり、相続される。それに対して、畑地は耕作期間のみで、耕作を放棄すれば占有権は消えるとみなされている。

4.2 主要作物の品種・栽培・利用

蘭嶼の人々の食を支える主要な農作物について、そのバラエティ、栽培様式などについて検討を加える。

タロイモ 近代台湾におけるタロイモ生産量には増減の波があり、第二次世界大戦中は増加し、その後は減じたが、1970年代後半から増えてきている。そうした中で、屏東県（1978年、3305ha）が最大の産地で、高雄県（同634ha）が第2位、次いで台東県（同293ha）が第3位であった。この状況は、現代においてもそう変わらないとみられる。

蘭嶼のタロイモには水芋と畑サトイモ（旱芋）とがある。ヤミの人たちは畑サトイモよりも水芋を好む。しかし、水田の造成は難しいので、畑サトイモ、サツマイモ、ヤムイモなど、斜面でも栽培できるものでもって補う。いずれも、基本的には周年栽培・収穫される。芋を収穫した後のカット苗（後述）が再び土中に植えられる。この場合、成熟には2年を要するとしている。除草は行われる。サトイモ類は連作を嫌い、特に畑作の芋は連作すると生育不良になるので、3～4年おきの輪栽が良いとされている（農業委員会台湾農家要覧増修訂再版策劃委員会編、1995、893）。その場合、水稻、その他の蔬菜との輪栽がおこなわれる。また、果園や蔬菜園での間作も可能である。なおタロイモは、気温が低かったり、水分が足りないと、育ちが遅かったり休眠状態に陥り、霜に合うと枯死する。

水芋のバラエティとしては *opinuviyau* (*opinuyau*), *ararun* (栽培最多), *kararo*, *paton*, *kanato* などがある。食物としては、穀物に次いで、水芋が美味とされ、畑サトイモよりも好んで植えられる。しかし、平坦地が少なく水供給も十分でないため、畑サトイモ・サツマイモ・ヤマイモ等で補われている (Kano and Segawa, 1956)。なお、鄭・呂 (2000, 243-244) は、これらの水芋が南洋的なもので、フィリピンから導入された可能性が高いとしている。

水芋田の開墾は男性の仕事であるが、作付けに当たっては、まず女性が盛装して、豊饒を祈願する。除草・収穫も女性の仕事である (徐, 1999, 16)。栽培法は、前述の鹿野の報告と変わるところはなく、収穫・植え付けはいつでも可である。収穫法は、収穫棒を深く差し込んで掻き回して根部を切断し、芋を引き抜くというごく簡便なものである。なお、収穫された芋の頭部から茎を切り落とし、大葉をも切り落とした茎、いわゆるカット苗 (橋本, 2002, 3, 9) がその場で再植されるという、いわゆる「茎植法」が用いられている。なお、水芋田の所有面積については、勤労・財富・社会的地位などにより差がある。

水芋は、主として親芋が食され、葉柄や葉も煮て食される (鄭・呂, 2000, 243)。また、節慶中に親戚用に3個の芋頭と干し魚が贈り物として用いられ、またトビウオ祭りでは煮た芋頭をどろどろにし、ブタの脂を混ぜて粉餅をつくり、親友に贈られる (鄭, 1996, 101-102)。また、新屋敷落成や新船進水式といった重要な儀式に欠かせないものである (大量に必要)。また、海の平穏を願って水芋を立て掛けることも行われる。

畑サトイモ (旱芋) など 畑サトイモは、基本的には焼畑で、無施肥・非除草で栽培されるが、常畑でも栽培される。畑サトイモのバラエティとしては、*keitan*, *miririrao* (栽培多し)、*magagung-a-miririrao*, *maragut-a-mirakasuri*, *mirakasuri* (栽培多し), *masuvu* などがある。畑サトイモの食し方については、水芋とそう大きく異なるところはなく、子芋・親芋を壺で水煮にして、茹だった芋の皮を剥いて食するのが一般的である (鄭, 1996, 72)。

その他のアロカシア (*Alocasia*) 系統のイモとしては、蘭嶼芋 (*gagusud: Colocasia kotoensis* Hayata)、姑婆芋 (クワズイモ、*roan: Alocasia macrorrhiza* Schott & Endl) がある。

ヤマイモなど ヤマイモは日当たりの良い山地に植えられる。開墾時は焼かないのが原則である (焼畑方式で開墾されるのはサツマイモ・アワ・畑サトイモ栽培用の畑のみである…徐, 1986, 79)。また、産婦は食べてはいけないとされる。ヤマイモのバラエティとしては *minimamayu*, *minimagaras*, *uvi-no-ruru*, *uvi-no-tokon*, *karusakes*, *rogrog*, *makumaipagabagaritan*, *rumaku*, *makumaipagabagaritan*, *rogrog* など15種ほどあるが、中でも *minimamayu*, *minimagaras*, *uvi-no-ruru* が主たる栽培種である。ヤマイモは日当たり良好な山地を好み、畑は耕さず、一般には1月に植え、9月～翌年4月に収穫されるが、蘭嶼

では2月15日（月圓の日）に播種し、11月中旬収穫される（徐、1999、19）。なお、タロイモやサツマイモは女性が栽培するものとされるのに対して、ヤムイモは男性が栽培するものとされている。

その他の薯蕷科 (*Dioscoreaceae*) 作物としては、蘭嶼田薯 (*iba* : *D. cumingii* Prain & Burk. …塊茎は食す、茎は縄材として用いられ、ブタの餌ともなる)、刺薯蕷 (*patan* : *D. esculenta* Burkill トゲドコロ…主食作物の一つで美味とされ、生食も可である) などがある。なお、ヤムイモは斜面に植えられるのに対して、トゲドコロは斜面下部の平坦面に植えられる（徐、1999、19）。

サツマイモ サツマイモは、今日では水芋に次ぐ主食作物である。新たに耕された畑に10～11月頃に植えるか、または5月末にアワ収穫後の畑に植えられる。バラエティは20種ほどあり、特に赤い表皮の *wakai-no-ibatan* はバタン島からはるか昔に導入されたという。畑サトイモと混植される。

小米 唯一の穀物であるアワ（小米 *karai*）はあまり多くは栽培されないが、*Tau-du-to* が宿る神聖な作物とみなされ、節慶の折りに使う神聖な食べ物であり、新築落成祝い等の祭事に使用されたり、産婦や老人用の食として小米飯、小米粥などが重宝される。12月始めに男子が銀冑を被って豊饒祈願し、しかる後12月3日に播種し（台東辺りでは2月播種…農業委員会台湾農家要覧増修訂再版策劃委員会編、1995、74）、翌年5～6月に収穫される。刈り取りは小刀で穂刈りを行う。小米の後作としては里芋を植え、翌年4月に収穫、収穫と同時に種をまく。またサツマイモを植えた場合は、6カ月後に収穫される。バラエティとしては *arai*, *richai*, *raga*, *borok* など、12種ほどある。

農具 農具としては、硬木を使って製された掘棒 (*kakali*) が使われる。用途に応じてさまざまなタイプのもが使われる（徐、1986、72-89に詳しい）。縁には、細かくエッジが付けられている。現在は、鉄製の掘棒が用いられている。家屋新築・大船進水式・豊饒祈願祭などの儀礼用にはヴァヴァゴアカヨ (*vava-got-a-kayo*) と呼ばれる頭部に湾曲した飾りの付いた儀礼用掘棒が用いられ、今もこの用途には特別な木で製された掘棒が用いられる。その他に、収穫用ナイフはイパガン (*ipagan*)、またパラ (*paran*) と呼ばれる鎌が除草あるいは清掃用に用いられる。

4.3 漁撈・牧畜

農作物以外の食物として、ブタ・ヤギ・ニワトリなどの飼育と漁撈が営まれ、貴重な蛋白質食物を供給している。ヤギは放牧され、ブタやニワトリは集落の中または周辺部で飼育されて

いる。なお、2002年現在、ヤギ998頭、ブタ805頭、ニワトリ427羽である（李、2005、2-7）。

漁撈はヤミの人々の生活や儀礼の中で、重要な位置を占める。3月朔日（*Mababai*）にミバノア（*Mivanoa*）の儀式で豊漁を願ってから、小船に1～3人、あるいは大漁船に6～10人乗り込んで出漁する。主要な漁獲対象はトビウオ、タイ、イルカ、タコ、夜光貝、海人草（アマクサ）などである。2004年の記録では漁船機動船55、伝統小船122、伝統大船9となっている（2003-2004年…李、2004、2-9）。

5. タロイモ栽培の実態——聞き書きから——

話者：A：(84歳：漁人)

B：(78歳：紅頭村)

C：(66歳：紅頭村)

D：(58歳：紅頭村)

E：(78歳：朗島村)

小西：小西達夫〈2003、9-11〉による。

余：余光 弘〈2004、101、165-170〉による。

2005年8月21～26日に実施した台湾蘭嶼での現地調査から、蘭嶼の農耕に関する聞き取りをとり纏めたのが本項である（2004年3月11～14日の調査での聞き取り、および小西達夫〈2003、9-11〉の調査報告でもって若干補っている）。

注：なお、本聞き書きは、調査に同行した関西大学非常勤講師の水田憲志氏が筆者の聞き取りを記録整理したものをベースにしている。

蘭嶼ではサトイモ類について、畑作の里芋をケイタンと呼び（A・C、余〈2004〉はkeytanと綴り、他にクイタン、キータンとも呼ぶ）、主として水田で栽培するタロイモをススリィ（A・D）またはソリ（B、小西はソリーと綴っている）と呼んで、区別している。なお、ケイタンという用語は両者を総称している場合にも用いるという意見もある。すなわち、サトイモ類の総称であると。（A）

〔上記のように、ピリオドの後に話者を（A）と記す場合は、その項の全ての節が話者Aによることを示す〕

5.1 ススリィ（*susuli*、ソリ *sol*、水芋）について

ススリィの主な種類とその特性は次の通りである。

5.1.1 ススリィ (ソリ、水芋) のバラエティ

- ①アラルン (*aralun*, *ararun*とも) (A・D) またはアラルウ (*araluu*) (C) は最もよく栽培されているバラエティで (D)、茎は濃い紅色である。植栽はいつでも可 (C) であるが、収穫については1年で可とするもの (C) と、3年かかるというもの (全員) とに分かれる⁴⁾。なお、休閑期間はおおむね1年であるという (D)。
- ②マガルンミニイラウ (小西はミニイラウとして里芋に分類) は水田に植えられるが、畑でも育つタイプである (A)。
- ③カラルンまたはカラルウ (Aは*karalun*、Cは*karaluu*と綴る…小西のいうカラロカ)。この品種も、水田・畑の両方で育ち、茎は黒い (A…このタイプはCさんの水田にあり)。
- ④カラルスリの茎は白く、1~2年で成長 (B、余 <101, 172>)。
- ⑤カナトゥ (カナト) の茎の色は黒または緑で、比較的早く成長する。カラルウと同じくらいで、ほぼ2年で成長。(B)
- ⑥台湾島の高雄辺りから将来されたウラノルルという大きなイモが穫れるものもある (一袋1000NT\$…約4000円もするという…A)。ウランルウルウと呼ぶ (小西)。
*小西はその他に、ミニシブル、オバン (匂いあり)、パットン、ミナカスリ (餅味、畑作兼用)、ムウリウリ、マスブを上げている。

5.1.2 ススリィ (ソリ、水芋) の苗と植え方

- ①新植用の苗は、茎を切ったもの (ウピまたはオピィ)、または小芋 (Bはイパニランスリまたはイパルルロスリと呼び、Aはアシナンと呼んでいる) を植える。前者はいわゆる「茎植法」である。生育については大きな差はないという (D)。
- ②いつでも植えることができるが、水がないと枯れるので、その時期と場所を選ぶ (A)。
- ③平地には水芋を植える (E)。
- ④新しく植えたイモをバヨワピナルウンと呼ぶ。

5.1.3 ススリィ (ソリ、水芋) の食し方

- ①水煮にして皮を剥いて食べる (C)。
- ②皮にひびが入る程度に茹で、皮を剥いて食す。トビウオと一緒に食する。(B)
- ③マイマイというシャモジ大の棒で芋をつぶしてモチのようにして食べることもある。食べるときは大皿に入れて豚の脂を熱したものを混ぜ、少し醤油を注いで、切り分けて食す。この食べ方は祭りの時も、日常でも同じようにする。(B)
- ④茎も食す…成熟したものの方が若いものよりよい (B)。
- ⑤葉も食す…炊たり油で炒めたりする。スープにすることも。昔は煮て食べた。(B)

- ⑥ケイタン（里芋）の方が水芋よりも美味しい（慣れているから）。ススリイ（水芋）は甘みがないが、味は悪くない。食べると少し痒くなる。（A）
- ⑦親芋を食べるのは祭りの時、普段は小芋を簡単なお椀で（簡単な調理法という意味）食べる。

5.1.4 ススリイ（水芋）の収穫法

- ①親芋と小芋とを一緒に収穫することはない。早くて1年、普通は2～3年で収穫、その間繰り返し補植をする。現在の水田は5年経っているなので、来年は1年間休ませる。（A）

5.1.5 その他

- ①水芋が一番大切な食物である。
- ②しかし、台湾電力の「廃料儲存庫」（低レベル核廃棄物貯蔵庫）ができてからは、イモの出来が良くない（イモの内部が腐る…E）。
- ③サツマイモなどと比べると、ススリイ（水芋）は台風に強い、大切な作物である（C）。

5.2 ケイタン（里芋）について

5.2.1 ケイタン（*keitan*、里芋）のバラエティ

- ①ケイタンは畑作の早芋の総称である（A・C）。
- ②ミニイラウ（*miniilau*）：小芋多し。水田に植えても良い（A、余、164）。
- ③マラカバ（白い）ミニイラウとマバウン（黒い）ミニイラウとに区分する（A）。
- ④マバウン（*mabaun*）：茎の色は黒い（余〈165〉）。
- ⑤ギンギン（*gingin*、リンリンとも）→小芋が柔らかい、イバスともいう（余〈166-167〉）。茎を植える。みそ汁の具にする。（A）
- ⑥オラスユイバタン（*oranyu i batan*…余〈168〉）は、小芋が多くなり、皮を剥いてみそ汁の具にする。昔はなかった。フィリピンからきたものである（A）。
- ⑦ミラカスリ（A）。
- ⑧オオランルラウは、台湾島からきた芋で甘い。マントウ（饅頭…具のない蒸しパン）の生地に入れる（A、余〈177〉）。

*その他に、小西はマスブウ（＝水田用のミニシブル）、マバンガクイタン、チチプチノカラルなどをあげている。小西によると、蘭嶼のサトイモ類は沖縄の田芋に類似するものや、匍匐枝を伸ばすタイプがほとんどで、染色体数は2倍体である。それらには小芋が少ないものとやや多いものがあるが、いずれも肥大した親芋が収穫対象となる。こうした特性は、ほとんどが2倍体の熱帯種からなるオセアニアや東南アジアのものに類似し

ている。ただし、台湾島から導入されたとみられるアチ（日本の晩生土垂タイプ）に酷似するものを除けばバタン諸島からの人の移動とともに蘭嶼に伝来したと推定できるとしている。

5.2.2 植え付けと収穫

- ①植え付けは周年可能である。したがって、周年植える人もある。しかし、夏は日差しが強いので、植えないのが一般的である。（A）
- ②10月植え。この場合は、収穫は翌年6月頃になる。
- ③12月植え。この場合は、翌年12月に収穫する。
- ④この旱芋を水田に植えることもある（A）。
- ⑤サトイモ畑にサツマイモを混植している（A）。
- ⑥親芋も小芋も一緒に収穫する（A）。
- ⑦植えてから収穫まで3年かかる（E）。

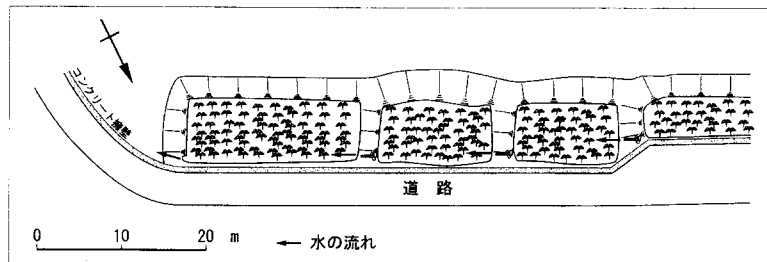


図6 タロイモ水田（紅頭村）

5.3 水田の構造（図6・7）

水田各部の呼称（Aによる）

- ①田＝カブルンまたはカブヌン
- ②水＝ノラ
- ③用水路からの採り入れ口＝ヒシヨ
- ④用水取水口＝サワランまたはサワサン
- ⑤排水口＝パシシワラン
- ⑥畦＝トカル
- ⑦石垣＝アトイ（石積みと管理は個人が行う）
- ⑧水田の中に残されている石はヴェアトウと呼ぶ

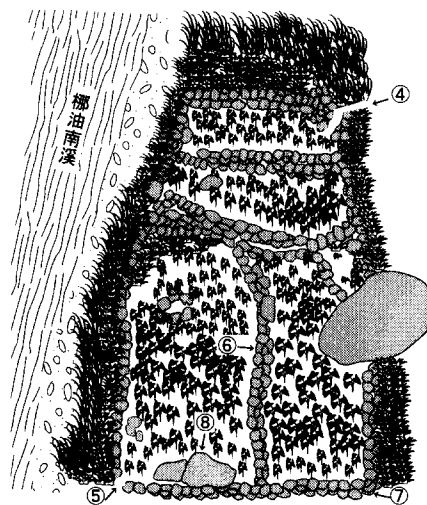


図7 タロイモ水田（椰油南溪の下流部）

5.4 耕作法

- ①水芋田の除草はする。肥料はやらない。(D)
- ②水は張ったままで、落とすことはしない(D)。
- ③水芋は2年連作し、5カ月～1年休閑する。休ませると綺麗な芋ができる。(B)
- ④水芋を植える前に水田を耕し、水を入れておく(荒起こしに当たる)。その際に肥料をやることはしない。ただし、古いイモの葉や雑草はゴミとして取り除く。(B)
- ⑤収穫の際に水を落とすことはしない(B)。
- ⑥水田は5年は使い続ける。最後に全部イモを収穫してから再植するが、いよいよ育たなくなったら1年休閑する。休閑田を再利用するときにはカヤを焼く。(B)
- ⑦礫や転石(ヴァトウ)など(図7)、動かせないモノはそのまま放置しておく(B)。
- ⑧水田の側の倉庫兼休憩小屋はサロワットカブリヤンと呼ぶ(B)。
- ⑨3年間は栽培・収穫を繰り返し、育ちが悪くなると全部引き抜いて、1～3年、場合によっては5年間の休閑をする。また、2年間は一部収穫と補植を繰り返すこともある。(A)
- ⑩耕起してから水を入れるが、その際に施肥をしたり、干草を鋤込んだりすることはしない。また、栽培中に水を抜くこともない。(A)

5.5 その他

- ①新たに自力で開墾した土地は自分(グォー)のもの(C)。
- ②山には竜眼(ムクロジ科の常緑樹…実は荔枝に似る)、椰子、ピンロウなどを植える(E)。
- ③台湾島からもたらされたタニシ=チンパンルーの害あり(C)。なお、タニシには短いものと長いものがあり、塩水で茹でて食べる。長いものはピテット(ピエット)、外来のモノはピテットリュウリュウという。(E)

5.6 その他作物と農耕様式

5.6.1 クワズイモ

- ①食べたら痒くなる。豚も食べない。(C)。

5.6.2 ヤマイモ=オビまたはウビ(C)

- ①植えてから1年で収穫。頭部分を切り残して、それを植える(イモの丈の長いものも短いものも同じ方法で植える)(A)。
- ②オビ(ウビ)は1月植え、11～12月収穫、1年で1畝ほどに成長する。トビウオ祭りの供物としても使う。(A)

……このウビはナガイモのことか？

③ウビのバラエティ

オビシラウ (掌型…ダイジョウか?)。(A)

ミニママコイ (芋は1^斗大)

ロゴドク (芋は1.5^斗大、成人のふくらはぎ程度の太さ)

ミニマガラス (芋は50cm大)

④ピックワは白いヤマイモで5ヵ月で成長、葉は野菜として食す (C)。

⑤パタン=小さなヤマイモで、芋は30cm大 (C)。

⑥ブランデウデウ=小芋のみ食し、親芋はたべない。芋の長さは約50cm。(C)

⑦ウビの食し方：水煮にして皮を剥き大皿に盛って、取り分けて食す (A)。

ヤマイモは山で焼畑して栽培…遠い箇所は紅頭山中にあり (A)。

5.6.3 サツマイモの種類

①昔は3種類あったが、現在は1種類だけ (A、余〈167〉)。

②ワカイ(サツマイモの一般呼称か?)はハンドボール大の大きさになる。台風に弱い。(A)

③いつでも植えられる。植えてから3~4ヵ月で収穫し食することができる (煮て)。(A)

④イモ畑(サトイモ、地瓜、サツマイモなど)に草が生えるとイモがうまく育たない。また、暑い時期に植えてもうまく育たない。(A)

5.7 土地利用と土地所有

①耕地はあちらこちらにあり、紅頭溪右岸に水田6区画 (B)。

②山は自由に使って良いが、平地は自由に使うことはできない (個々に所有権ありということ) (E)。

③水田の相続は、兄弟で相談して決める。女子は関係なし (E)。

④山芋やサツマイモの畑は相談しない。サツマイモや里芋は平地でも、山地でも植える。(E)

⑤人の所有地に水芋を勝手に植えると喧嘩になるが、土地を借りることはできる (E)。

⑥水田は男子が相続。一枚の水田を分けるときは、石を置いて目印とする。(A)

⑦水田は男兄弟が等分して相続。女子は土地相続はしないで、装飾品などを母親から譲り受ける。(B)

⑧女子は相続しない。母親から装飾品を貰う。ただし、余裕があれば分与あり、また子供が女子だけである場合は、女子が相続する。(A)

い)。これをマンランカイソソリという。家の新築披露にも同様にいっぱいイモ(水芋・里芋・山芋)を用意して客をもてなす。大きなモノは親戚にあげる(ミンニモという)。このために、予めその用途に合わせてイモを植えておいて、一斉に収穫する(マブススリ…偉いという意味)…この収穫の際には<女性が>着飾って祭礼用収穫棒で収穫する。この際には、親戚の女性も手伝う(パンマンという)。(A)

- ⑧イモ類の食し方は基本的には同じで、水煮して皮を剥いて食べる(A)。
- ⑨船の進水式や家の新築の祝いや儀礼に欠かせない(小西)。

6. 結び

黒潮ルートに沿う根栽農耕の分布にみられる連続性と非連続性に注目して、その連続性の重要な要の一つである台湾南部の蘭嶼を取り上げて、まず周辺地域との関係を整理した。その結果、南のフィリピン、バタン諸島との関係が最も深いことがわかった。ただし、長い人類史のなかでは他地域との関係にも留意する必要がある。特に、台湾島の「原住」民族とは形質・儀礼・言語・農耕などの面での類似性や関係性が大きいことがわれ、黒潮ルートにおける蘭嶼の正確な位置をはかる上でその解明が欠かせない。当然、そうした検討は日本の南西諸島の根栽農耕の基底的部分とその性格を解明することにも及ぶことになる。その場合、先島諸島と沖縄島との関係、あるいは類似性の検討が欠かせない。そうした作業は、まさにフィリピン・台湾・南西諸島を結ぶ黒潮ルートに沿った根栽農耕の姿をはっきりと浮かび上がらせることにつながる。

本論では、その作業の一環として蘭嶼の根栽農耕、特にタロイモ栽培の実地調査を踏まえて、タロイモ栽培の実態と、そこから見えてくるタロイモ栽培文化における蘭嶼の位置を解き明かす試みをおこなった。その結果を、他地域のものと一緒に示したのが表2である。全体的にみると、概ね似通った栽培様式の下でタロイモ栽培が行われていることが先ず指摘される。それは、タロイモという湿潤環境を求める作物を、灌漑技術によって栽培環境を保証しながら、耕耘、休閒システム、掘棒といった特徴ある生産様式・農具を採り入れて周年栽培・随時収穫する農耕体系であるといえよう。詳細に比較すると、根栽農耕体系が発達したオセアニアに属するフィジーでは、多様な耕地形態を採り入れながら多くのバラエティ(品種)のタロイモが活発に栽培されている。それに対して、根栽農耕圏の最北端に位置する南西諸島では、数少ないバラエティ(品種)がよく整備された耕地と丁寧な栽培様式の下で、しっかりと施肥をして密植されている。ただし、気候的な制約があるため周年栽培・随時収穫は困難で、季節を選んで栽培されるのが一般的である。

表2 タロイモ栽培様式の比較

地域		南西諸島	蘭 嶼	フィリピン北部	フィジー
一般事項	耕地形態	M, P, T	T, P	T, P, H	D, I, M, P, T, H
	品種の多寡	少	少	多	多
準備	耕 転	◎	◎	○	◎
	足踏み耕	◎	×	?	◎
	施 肥	◎	○	○	○
	灌 漑	◎	◎	○	◎
植え付け時	苗の種類	カット苗・子芋	カット苗・子芋	カット苗・子芋	カット苗・子芋
	時 期	冬・春・夏	随時 (夏季回避)	随 時	随 時
	正条植	◎	△	△	×
	植え付け密度	密	密	密	粗
	灌 漑	◎	○	○	◎
	施 肥 (緑肥)	△	×	×	△
	育成中	除 草	△	○	△
施 肥		×	×	×	×
灌漑制御		◎	△	○	○
マルチング		?	?	?	○
収穫	時 期	冬・春・夏	随 時	随 時	随 時
	方 法	部 分	部 分	部 分	部 分
	灌 漑	△	△	?	△
その他	農 具	堀棒・へら	堀棒?	堀棒・へら	堀棒・突棒
	連作・補植	○	○	?	○
	休 閑	◎	△	?	○
	サトイモ科他属	Ai, Am, Ca, Cg	Ai, Ca, Cc, Xs, Am	Ai, Ca, Cc, Am	Ai, Cc, Xs, Am
	畦植え	△	○	○	◎

注1 基本的に、伝統的な栽培様式の代表的な特徴を取りあげた。そのため、詳細にみれば、表示された特徴とは異なる側面がみとめられることもある。

2 各事項について：◎は該当（高度）、○は該当（中程度）、△は該当（低度）、×は非該当を意味する。

3 耕地形態：D=溝田型、I=揚田型、M=マウンド型、Pi=ピット型、P=平地水田型、T=棚田、H=ホール型。

4 Ai = *Alocasia indica* (Roxb.) Schott = ピアミラ

Am = *Alocasia macrorrhiza* Schott = クワズイモ

Ca = *Colocasia esculenta* (L.) Schott var. *antiquorum* = 里芋 (温帯種)

Cc = *Cyrtosperma chamissonis* (Schott) Merrill = ピアカナ

Cg = *Colocasia gigantea* Schott = ハスイモ

Xs = *Xanthosoma sagittifolium* (L.) Schott = タニア

各地域の主たるものをあげた (フィジーについてはAmの有無が不詳)

そうした、二つのタイプの間であって、蘭嶼とフィリピンは両者の中間的な性格をもち、一つのグループを形作っているようにみえる。蘭嶼に限っていえば、基本的には、フィリピン北部のパターンに類似し、植え付け時期などで季節性が現れてたり、相対的にバラエティ(品種)の少ない点などでは南西諸島に通じる面も認められるといえよう。その意味では、蘭嶼はフィリピンと台湾島・南西諸島を結ぶ位置にあるとも言えるかもしれない。ともあれ、蘭嶼は、大きくはアジアからオセアニアにかけて広がる根栽農耕圏におけるタロイモ栽培様式の範疇の中に位置づけられることは確かである。

[付記] 本研究は、第3研究部門比較文化研究班における研究の一部を取り纏めたものである。研究にあたっては、研究費の一部として平成18年度日本学術振興会科学研究費の基盤研究(C)「黒潮ルートのイモ栽培文化——琉球弧の島々と台湾——」(研究代表者:橋本征治)、平成18年度日本学術振興会科学研究費の基盤研究(B)「南海地域における琉球の歴史地理的実体と意味の総合的研究」(研究代表者:高橋誠一)の研究費を使用した。なお、図表の作成は関西大学非常勤講師の永田憲志氏にお願いした。

注

- 1) サトイモ類の呼称として、タロイモは主として灌漑耕作される熱帯性のもの(畑作されるケースもある)、サトイモは畑作される温帯性・熱帯性のもの、里芋は温帯性のもの、総称的に使う場合はサトイモ類と呼ぶことにする(橋本、2001、313-314参照)。
- 2) かつてIvatasまたはIwatasと呼ばれる集落があった。
- 3) 水田が畑地に比べて狭小であるのは、総体的に広い平坦面を得ることや広い平坦面を潤すだけの灌漑用水を得ることがいずれも困難であるという理由が挙げられている。
- 4) こうした見解の差違は、次の二つの理由によるものと考えられる。一つは、必要なだけ部分的に収穫し、随時補植しながら、3年ほど使ってから全面収穫するケースである。二つめは、収穫の目的の違いからきているケースである。すなわち、早く収穫したければ1年目から可能であるし、イモを大きく育てたい、特に祭礼に用いる大きなイモを用意したい場合は、収穫期を延ばすことになる。したがって、収穫は1年目から可能であると理解しておきたい。

参考文献

- 衛恵林・劉斌雄(1962)『蘭嶼雅美族的社会組織』、中央研究院民族学研究所。
- 奥田彥・岡田謙・野村陽一郎(1941)「紅頭嶼ヤミ族の農業」、『大南洋文化と農業』、325-372、河出書房。
(他に財産制、社会組織、労働と漁撈の論文あり)。
- 国分直一(1986)『海上の道—倭と倭的世界の模索—』、福武書店。
- 小西達夫(2003)「イモ」、CASニューズレターNo.119、9-11。
- 佐々木高明(2003)「新・海上の道とYAMI文化」、CASニューズレターNo.119、5-7。
- 徐瀛州(1986)「紅頭嶼ヤミ族の掘棒」、エトノス20、73-89。
- 徐瀛洲(1999)『蘭嶼之美』、行政院文化建設委員会。
- 中央研究院民族学研究所(1993)『民族学研究所資料彙編』、中央研究院民族学研究所。
- 陳玉美纂修(2001)『台東県史—雅美族篇—』、台東県政府。

- 陳正祥 (2001) 『台湾地名辞典』、南天書局。
- 鄭漢文 (1996) 雅美族的民俗植物、東台湾研究、創刊号、67-104。
- 鄭漢文・呂勝由 (2000) 『雅美民族植物』、地景企業股分有限公司。
- 農業委員会台湾農家要覧増修訂再版策劃委員会編 (1995) 『増修訂再版台湾農家要覧：農作物篇 (一)』、財団法人豊年社。
- 橋本征治 (2001) 「日本の農耕文化とイモ栽培—南方の視点から—」、関西大学東西学術研究所創立五十周年記念論文集、313-326。
- 橋本征治 (2002) 『海を渡ったタロイモ—オセアニア・南西諸島の農耕文化論—』、関西大学出版部。
- 橋本征治 (2004) 「日本の先史文化と周辺地域—南方の視点から—」、関西大学東西学術研究所紀要、第37輯49-67。
- ベルウッド、P. (植木武・服部研二訳) (1989) 『太平洋—東南アジアとオセアニアの人類史—』、法政大学出版部。
- 森口恒一 (2003) 「バタニク諸語とヤミ文化」、CASニューズレターNo.119、32-33。
- 余光弘 (2004) 『雅美族』、三民書局。
- 余光弘 (1998) 『台湾原住民史—雅美族史篇—』、台湾省文献委員会。
- 李素馨絵編輯 (2005) 『蘭嶼海岸遊憩憩憩規劃』、台湾県政府。
- Kano, T. and K. Segawa (1956) *An Illustrated Ethnography of Formosan Aborigines (Vol. 1): The Yami*, Maruzen Company, LTD.